北陸大学　紀要
第28号（2004）
pp. 207～224

エレン・ホワイトの労作教育観

村　上　良　夫 *

Ellen White's Views of Manual Labor Education

Yoshio Murakami *

Received October 25, 2004

Abstract

Ellen White emphasizes the importance of manual labor education from two viewpoints. First, according to the Bible, labor is an essential factor which shapes the character of God's people through the whole history and for eternity. Second, in every possible aspect——physical health, mental power, moral power, safeguard against temptation, usefulness, attitude toward practical life, and so on——labor is indispensable to all-round character development. Thus labor plays a central part in education. It is a part of God's gospel plan for man's recovery from the Fall, she stresses.

Though Ellen White's views sound old-fashioned to us 21st-century people, her assertion seems to become more and more relevant for this superficial, unstable, and "virtual" IT Age.

Ⅰ．はじめに

19世紀米国の宗教家・教育家・著述家として知られるエレン・ホワイト（Ellen G. White, 1827-1915）の労作教育観を考察することが本稿の目的である。(1) 日本のみならず世界中で「教育」が論議される今，彼女の「労作教育」論は大きな示唆を与えるように思われるからである。「これは古い物語，けれども常に新しい」（アンデルセン）。(2) 古色蒼然たる素朴な教育論が，実は，現代人が看過してきたきわめて重要な側面を含むことに，われわれは気づくであろう。

手順として，まず時代背景を考える。ヨーロッパとアメリカの，教育思想の大きな流れと，その中でのエレン・ホワイトの位置づけ。そして次に，彼女の「労作教育」論の特色に注目する。ここが本稿の中心部分である。最後に，彼女の労作教育論の現代的意義に触れてしめくくりとしたい。

---

* 未来創造学部
School of Future Learning

なお，エレン・ホワイトの全体像的説明はここでは省き，あくまでも彼女の「労作教育」論そのものに絞って検討する。

Ⅱ．時代背景

（1）転換期――古典教育から実学へ

17世紀から18世紀にかけて，産業革命の進展とともに，そして啓蒙主義の普及とともに，ヨーロッパの教育はそれまでと異なった様相を呈し始める。ギリシア語ラテン語による古典の講読を中心とするエリート養成教育から，産業社会を生き抜く一般大衆のための実学が強調されるようになるのである。つまり，古代ギリシア・ローマや中世ヨーロッパを考えれば容易に想像がつくように，それまで2000年以上にわたって西欧世界の教育は言葉・思想・古典を中核とするものであった。すなわち，書物（古典）中心の観念的な教育が主流であった。しかし，時代の波が押し寄せる。一方で現実に産業革命が進行し，他方では政治的思想的に，国王・貴族だけが“人間”であった時代から平民を含めて“人間一般”の時代へと，大きく移り変わりつつあったのである。[(3)] そこでは当然“教育観”にも変化が生じてくる。現実の生活を重視し，仕事や有用性を意識する，実学的な見方である。先鞭をつけたとされるのが，誰あろうイギリスの思想家ジョン・ロック（John Locke, 1632-1704）であった。[(4)] 彼は『教育論』（*Some Thoughts Concerning Education*. 1693）の中で，「労働によって覚えたり練習したりする手仕事の技術は，・・・われわれの器用さや熟練の度を増すだけでなく，われわれの健康にも役立つ」と述べ，「地方にいる紳士には次の一つのこと，いやむしろ次の二つをおすすめしたい。すなわち園芸あるいは農業一般，それに大工，木匠，木工旋盤など材木を用いる仕事，こういったものが，研究をしたり事務をとったりする人にとって，適切なそして健康的なレクリエーションだ」と強調する。[(5)] 精神と身体のバランス，そして，実生活の大切さを彼は説いた。大陸では，ジャン・ジャック・ルソー（Jean Jacques Rousseau. 1712-79）が，[(6)] 名著『エミール』（*Emile*. 1762）の中で，自然の中での教育と共に，労作教育・職業教育の重要性を訴える：

> あらゆる技術の中で第一位のもの，最も尊敬されるべきものは，農業である。わたしは鍛冶屋を第二位に，大工を第三位に，という順におきたい。
>
> 働くことは，社会的人間に欠くことのできない義務である。
>
> ところで，人間に衣食を提供しうる職業の中で，いちばん自然の状態に近いのは手を使う労働である。・・・それにしても，農業は人間のいちばん基本的な職業である。これは，人間が営み得る職業の中でいちばんりっぱな，いちばん有用な，したがってまたいちばん高貴な職業である。
>
> わたしはどうしてもエミールには何か腕に職をつけてやりたい。・・・りっぱな職業を選ぶことにしよう。ただし，有用性のないところにはりっぱさもないということをいつも忘れないようにしよう。[(7)]

ルソーの思想は，ペスタロッチ（Johann Heinrich Pestalozzi, 1746-1827）やフェレンベルグ（Philip Emmanuel von Fellenberg, 1771-1844），ヴェルリ（Jacob Wehrli, 1790-1855）らに受

け継がれていく。[8]

ヨーロッパのこうした動向は，当然アメリカにも影響を及ぼさずにはいなかった。ペンシルベニアのベツレヘムで集団生活を送ったモラビア兄弟団は少年たちに農業を教え，メリーランドでメソジスト派が経営するコークスベリーカレッジはスポーツに代えて園芸と木工を強調している。[9]

だがしかし，アメリカの，特に高等教育全般の雰囲気としては，やはり従来の，古典語と古典文学，そして神学などがカリキュラムの中心であった。それに対する批判も増してくるが，しかしそれでも伝統的な古典カリキュラムを守ろうとする大学側の姿勢は，1828年の「イェール大学レポート」にも現れている。もはや死語となった古典語にこだわるのはやめて，実際的な職業教育を導入したらどうかという声に対して，「イェールレポート」は「知的修養において習得されるべき二大要点は，精神の鍛錬とその中身である。精神の能力を伸ばし，精神に知識を蓄えるということである」と主張する。そして，これらの目標は古典的カリキュラムによって最もよく達成されうるのであり，実際的な科目等は，確かにそれなりのよさはあろうが，大学の本務にはあらず，とするのである。この「レポート」の影響は甚大であった。[10]

さて，にもかかわらず，実際的な教育を求める声は消えない。1820年代半ばに始まった「マニュアル・レイバー運動」（American Manual Labor Movement）は1835年ごろに最高潮に達する。主として神学校や教会系のカレッジの学生たちに手工労働・筋肉労働を体験させようとするものであるが，そこでは手工労働は健康を維持増進すると同時に，学費を賄えるという二大利点が強調された。[11] この1830年代は実際的教育へのさまざまな動きが目立った時期である。1831年には「教育機関における手工労働促進協会」（Society for Promoting Manual Labor in Literary Institutions）がニューヨークに設立される。[12] そして，そのいわばモデル校ともいえるのが，1833年にオハイオに設立されたオバリン大学（Oberlin College）であった。聖書をすべての科目の基本とし，聖書の学びと，手工労働・筋肉労働を含む生理学の学びとが，最重要とされた。「本学の教育体系は，知性のみならず身体と心を養うものである。なんとなれば最高の全人教育を目指すからである」と創立者は謳っている。[13] さらに，オバリン大学の『第一回年次報告』は手工労働部門を「完全な教育にとって不可欠のもの」と見なし，いくつかの理由をあげている。「学生たちの健康維持」，「身体と魂は密接に交感しているがゆえに・・・労働は思考の明晰と強さを促進する」，経済的利益，勤勉と節約の習慣を形成する，現実の生活というものを知ることが出来る，等々。[14] また，この時期，マサチューセッツではホラス・マン（Horace Mann, 1796-1854）の活躍が目立つ。“アメリカ公教育の父”と評されるマンは，初等教育の重要性を説き，実際的教育の必要性を主張し，カリキュラムの中に健康教育を含めるよう訴えている。[15]

教育改革の動き，特に手工労働を教育に取り入れようとする動きは，19世紀半ばには奴隷制をめぐる激しい対立と南北戦争の中でやや退潮するが，南北戦争後，再び息を吹き返す。これには戦争中に成立したモリル法（Morrill Federal Land Grant Act. 1862）が大きな引き金となった。これは農学や工学など実学目的で大学を設立しようとする州に対し，連邦公有地の無償供与を定めたものである。[16] さらに，南北戦争後のいわゆる再建の時代，都市化・産業化の進展の中で教育の大衆化も進む。特に1880年代は手工訓練（manual training）と職業教育が

全米の公立学校で導入されていく。手工訓練は「知力を増進し」，品性・忍耐・自尊心・自信を育み，秩序や正確さ，整理整頓の習慣をつける，とされた。[17] かくて19世紀末の2，30年間は，イェール風の古典的教育と勢いを増す実学的教育がせめぎあう“混乱”の時代となる。しかし一般的傾向としては明らかに，古典や古典語にかかわる科目は必修から選択となってカリキュラム上の比重が小さくなり，もっと実際的で役に立つ新しい科目が前面に出てくるようになる。20世紀初頭，第一次世界大戦のころまでには，アメリカの初等教育は社会の要請に応じる実学志向の強いものへと明らかな変貌を遂げていく。[18] アメリカの高等教育は，現代もなおそうした潮流の延長上にあると言える。人間知性の陶冶を眼目とするリベラルアーツの伝統と，現実社会の必要に合わせた実用主義的・職業主義的な実学志向と，[19] この2つの流れの中で前者が次第次第に足場を失い，後者の比重がますます高まるという傾向がずっと続いているのである。

(2) エレン・ホワイトの位置づけ

前節で欧米の教育における「実学」的思想の系譜をごくおおざっぱにたどってみたが，それではエレン・ホワイトの「労作教育」論はそうした中でどう位置づけられるのであろうか。さまざまな見方があろうが，ここでは特に3つの点を指摘しておきたい。

第一。ミラー運動という，キリスト再臨の切迫を信じ訴えるまさに“終末”運動[20]の熱心なメンバーでありながら，エレン・ホワイトとその夫ジェームズ・ホワイトは，比較的早くから教育に関心を向けている。これは稀有な，特異なケースといわねばならない。つまり，終末近しと信じる者たちにとっては，普通，子弟の教育は関心の埒外にある。世の終わりが近いのに，何を今さら子供たちを学校に通わせる必要があるのか？それは不信仰ではないか，キリスト再臨の切迫を信じていないからではないか。この世のことにとらわれず，ひたすら祈りと集会に励めばいいのだ。だいたい人間の学問など，信仰の妨げになるだけだ・・・これが終末論者たちの“常識”であった。[21] しかしエレン・ホワイトは，1844年秋のいわゆる“大失望”によるミラー運動の破綻のあとまもなく，態度を変え始める。キリスト再臨は間近だと強調しつつ，日時は特定できないと述べて，現実に適応する姿勢を示し始めるのである。[22] 一般の終末論者たちには納得がいかないのも当然であろう。1862年になってもまだ，ある信徒はジェームズ・ホワイトに，「主の来臨の切迫を心から信じている我々が，子供たちに教育を与えようとするのは，正しくて矛盾しないことなのでしょうか。もしそうなら，いいことより悪いことのほうを倍も覚えるような，地区の公立学校に子供をやらねばならないのでしょうか」と尋ねている。これに対してジェームズ・ホワイトは，「キリストがもうすぐ来られるからといって，知性を向上させなくていいということにはなりません。よく鍛錬され知識を身につけた精神が，キリスト再臨という深遠な真理を最もよく受けとめ理解することが出来るのです」と答えている。[23] これは先ほどの質問の前半部分に対する模範的な回答であり，このあとも，いや現代に至るまで，再臨信仰に立脚し，エレン・ホワイトを中心的創始者とするところのSDA教団（Seventh-Day Adventist Church）の，教育事業の根本的理由の一つとなっている。そして後半部分に応えるようなものとして，すでに1850年代から始められていた教会員による学校が，やがて1872年，エレン・ホワイトの“預言者的”指示のもとにミシガン州バトルクリークにおいて本格的に開始されることになる。[24] 終末運動から出発した団体が，短期間に視

野を拡大し，日常的で将来にかかわる“教育”という遠大な事業に本格的に乗り出したということは，これはきわめて珍しいケースといわねばならない。

第二。エレン・ホワイトによる労作教育の強調は，当時の歴史状況を反映している。前節で見たとおり，教育の中での身体労働の意義は，19世紀全体を通じて高唱されたことであった。SDA信徒の中にしばしば見受けられるような，教育における労作の重要性を説くエレン・ホワイトの労作教育論はきわめてユニークなものだとする見方は，SDAの歴史家ジョージ・R・ナイトの指摘するとおり，まったくの誤解である。(25) 教育改革という，“時代”の雰囲気をエレン・ホワイトは呼吸し，労作教育を力説する“時代”の声に，彼女は深く共感した。預言者的指導者エレン・ホワイトは，まさしく“時代”の子であった。ホワイト夫妻は著書の中にホラス・マンの著作からの抜粋を入れているし，エレン・ホワイトはオーストラリア滞在中，息子にオーストラリアに来ることがあればマンの著書をいくつか持ってきてほしいと頼んでいる。(26) あるいは，オバリン大学の労作教育論や教育理念とSDAの学校の理念との顕著な類似性については，ジョージ・R・ナイトがすでに明らかにしている。(27) 労作教育を柱の一つとするエレン･ホワイトの教育観は，天から降ってきたのでも地から湧いたのでもなく，時代の所産であり，当時の歴史状況の中から生み出されたものであった。(28)

第三。19世紀米国という時代状況の産物でありながら，しかしエレン・ホワイトの労作教育論は今なお命脈を保ち，実践され続けている。19世紀米国教育界のさまざまな試みが消え去った後も，彼女の教育理念だけは生きて受け継がれ，全世界で――大学99校を含む6,700の学校，65,700人の教師，そして125万人の生徒・学生という空前の規模で（2003年12月末現在の統計）(29)――実践されているのである。なぜ彼女の教育理念は今も生きているのか。ふたつ理由が考えられる。一つは，宗教団体の“預言者”的指導者として，彼女の言説は絶対的権威を有するとされるからである。時代を超えた絶対的真理と信じられているからである。もう一つは，彼女自身のすぐれたセンス，バランス感覚のゆえに，そのメッセージの内容がかなり普遍的妥当性を持つものとなっているからではないか。もしもあまりにも偏った，極端な内容のものであったなら，いくら預言者のご託宣でもこうまで長続きせず，こうまで広く受け入れられ実践されることはなかったのではないか。内容そのものにそれなりの一般性があるからではないか，と考えられるのである。

さてこうしたことを念頭に置いた上で，次に実際に彼女の労作教育観を見ていきたい。

Ⅲ．エレン・ホワイトの労作教育観

ここではエレン・ホワイトの労作教育観，特に，彼女がどういった意味で労作教育の重要性を説いているかを考察したい。その前に，彼女の言う「労作教育」とは具体的にどのようなものなのかを，教育に関する彼女の主著『教育』（*Education,* 1903）の「労作教育」（Manual Training）の章からいくつか見ておきたい。

> 労働による鍛錬は放縦を防ぎ，勤勉と純潔と強固な心を助長させる。このようにして労働は，人間を堕落から救う神の大いなるご計画の一部分となるのである。

一般的に言って青少年たちにとってもっとも益のある運動は有用な仕事の中に見出される。・・・若い人たちが役に立つ人間になるように訓練され，人生の重荷を負うことを教えられるとき，心と品性の成長は最も効果的に促進される。

労作教育には，これまでよりもいっそうの力を入れるだけの価値がある。最高の知的霊的教養を与えるとともに，身体の発達と実学教育のために，出来るだけ最上の設備の整った学校が建てられなければならない。

労作教育として，農業ほど価値のあるものはない。農業の働きに対する興味をよび起こし，これを助長するために，もっと大きな努力を払うべきである。教師は農業について聖書に言われていることに注目するがよい。すなわち，地を耕すことは人類に対する神のご計画であることや，全世界の支配者であった最初の人アダムは庭園の手入れを命じられたことや，この世でもっとも偉大な，そして真に高潔であった人々の多くは，地を耕す人々であったことなどがしるされている。

主として書籍だけから得た教育は，とかく表面的な考え方に陥りやすい。実地の働きによって，緻密な観察力と独自な考え方が養われる。実地の働きが正しくなされるとき，それはいわゆる常識という実際的な知恵の発達に役立つ。また物事を計画し実行する能力が発達し，勇気と忍耐力が増し加わる。(30)

学科内容としての，あるいはカリキュラム上の，あまり細かなことには触れずに，ただ大枠としての労作教育の理念と意義を繰り返し説く。これは『教育』の30年前，1872年に書かれた「正しい教育」という雑誌記事でも同じである。教育に関するものとしては最も初期のもので，しかももっとも包括的な文書のひとつとされるこの「正しい教育」でも彼女は，有益な労働が人間の全面的な，バランスのとれた成長・発達にいかに不可欠かを熱を込めて語っているのである。(31)

さて，ここで本稿の中心課題にはいる。なぜ労作教育はそんなに重要なのか，エレン･ホワイトはどう説明しているのか。労作教育の意義に対する彼女の理由づけを検討していきたい。

エレン･ホワイトは労作教育の重要性を，２つの観点から説いていると考えられる。一つは聖書からの理由づけ，もうひとつは具体的現実的効用からの理由づけである。

（1）労作教育の重要性――聖書的歴史的観点から

これは，言うなれば“救済史”的視点からの理由説明である。聖書にこう書いてある，だから大事なんだ，という有無を言わさぬ論法である。

エデン

「労働は神聖であって神がお定めになったものであり，心身の健全な発達になくてならないものとして，エデンでアダムに与えられたものであることを，子供たちにしっかり教え込みま

しょう」とエレン･ホワイトは告げる。[32] 確かに聖書によれば，世の初め，天地創造の際に，神はアダムとエバに園の世話をゆだねた:「主なる神は人を連れて来て，エデンの園に住まわせ，人がそこを耕し，守るようにされた」(創世記 2 章15節。新共同訳)。エレン・ホワイトはこう解説する：

> エデンに住むアダムとエバには，「それを手入れし，守るために」園の管理が任せられた。彼らの仕事は，たいくつなものでなく，楽しく爽快なものであった。神は，頭脳を活動させ，身体を強壮にし，能力を発達させるために，労働を祝福として人間にお与えになった。[33]

「仕事なしではアダムは幸福ではいられないことを，神はごぞんじだった」。[34]「人間の幸福をもたらすものが何であるかを知っておられた創造主は，アダムに仕事をあてがわれた。働く男女だけが，生活の真の喜びを発見する」。[35] 要するに，「労働は呪いではなく，祝福である」。[36]

このように，人類歴史のそもそもの初めから，労働は重要な意味を持っていたとエレン･ホワイトは強調するのである。

預言者の学校

古代イスラエルにおいて，預言者サムエルの周囲にいた預言者集団（サムエル記上　10章，19章等参照）を指して，エレン・ホワイトは「預言者の学校」と表現する：

> 青年教育の施設として，預言者の学校が建てられた。・・・預言者の学校は，腐敗が広がるのを防ぐ防壁としてサムエルが創立したもので，青年の道徳的，霊的幸福に貢献し，指導者や助言者として，神をおそれて行動する資格のある人物を養成し，国家の将来の繁栄に資するためであった。サムエルは，この目的を達成するために，神をおそれ，知的で勤勉な青年を多く集めた。彼らは預言者の子と呼ばれた。・・・彼らは，学識と信仰の両面において，人々の尊敬と信頼をかち得ていた。[37]

そして，この「預言者の学校」に学ぶ者たちは，――ここが重要なのであるが，

> 学校の生徒は，土を耕すとか，あるいは何かの筋肉労働に従事して，自分で働いて自活した。イスラエルにおいてこれは不見識でも卑しいことでもなかった。実際，子供に有用な仕事を教えないで育てることは，罪悪であると思われていた。どのような高い地位につくための教育を受ける子供であっても例外なく，すべての子供に，何かの職業を教えることが神の命令であった。[38]

労作教育の重要性をこのように指摘した上で，彼女はそれを現代に適用する：

> イスラエルの時代と同様に，現在でも，すべての青年は実際生活の義務について教え

を受けなければならない。だれでも何かの職業の知識を獲得し，もし必要ならば，生計を立てられるようにしなければならない。これは人生の浮沈に対する備えとしてばかりでなく，身体的，知的，道徳的発達上からも重要なことである。肉体労働によって生計を立てる必要がないことがはっきりわかっている者であっても，なお働くことを教えなければならない。肉体の運動をしなければ，だれも丈夫な身体と活気に満ちた健康を保持することはできない。そして，規律に従った労働の訓練は，強く活気のある精神と，高貴な品性の獲得に欠くことのできないものである。(39)

イエス

キリスト教の中心，救い主イエスは，労働の尊厳や労作教育についても我々に模範を示しているとエレン・ホワイトは言う。イエスが労働者階級（職人）に属していたことは確かである：「この人は大工の息子ではないか」（マタイによる福音書13章54節），「この人は大工ではないか」（マルコによる福音書６章３節）。

エレン・ホワイトは次のように述べる：

イエスは手仕事をおぼえ，ご自分の腕でヨセフといっしょに大工に仕事をされた・・・イエスが子供と青年の時代に働かれたとき，その心と身体が発達した。・・・イエスは道具のとり扱いでさえ不完全であることを好まれなかった。彼は品性において完全であられたように，職人として完全であられた。イエスは，ご自分の模範を通して，勤勉であることはわれわれの義務であること，われわれの働きは正確に徹底的にしなければならないこと，またこのような労働はとうといものであることをお教えになった。(40)

まさしく「彼の模範は，勤勉であることは人の義務であり，労働は尊いものだということをわれわれに教えている」。(41) そしてエレン・ホワイトは，イエスの実例を現代の教育にあてはめるのである：

手を役立たせることを教え，生活の重荷の部分のわけ前を負うように青年たちを訓練する実際の働きによって，肉体的な力が与えられ，あらゆる能力が発達させられる。・・・神は働くことを祝福としてお命じになったのであって，勤勉に働く者だけが人生の真の栄光と喜びを見いだすのである。(42)

パウロ

使徒パウロの歩みにも労働と労作教育の意義が示されているとエレン・ホワイトは見る。確かに新約聖書には，「パウロはこの二人［アクラとプリスキラ］を訪ね，職業が同じであったので，彼らの家に住み込んで，一緒に仕事をした。その職業はテント造りであった」（使徒言行録18章２，３節）と記されている。またパウロ自身，信徒仲間への手紙の中で，自分は「だれにも負担をかけまいと，夜昼大変苦労して，働き続けた」;『働きたくない者は，食べてはならない』;「落ち着いた生活をし，自分の仕事に励み，自分の手で働くように努めなさい」

と勧めている（テサロニケの信徒への手紙二３章８,10節；一４章11節）。彼もまた働くことの尊厳と重要性を認識し実践していたといわねばならない。

エレン・ホワイトはこう説明する：

> 労働は，のろいではなく，祝福である。・・・パウロは，肉体的労働を怠る者は，やがて衰弱することを知っていた。彼は若い伝道者たちが，彼らの手を動かし，筋骨を活動させることにより，伝道地において彼らを待ち受けている苦労と窮乏に耐える力が与えられることを，彼らに教えようと望んだ。そして彼は，もし自分が自分の体のすべての部分を適当に運動させないならば，彼自身の教えが生気と活力を失うことを自覚していた。[43]

天国

来るべき新しい世界，いわゆる天国においても，労働は高い価値を有するとエレン・ホワイトは見る。聖書には次のような，よく知られた天国の描写があるからである：

> 彼らは家を建てて，そこに住み，
> ぶどう畑を作って，その実を食べる。
> ・・・
> わが選んだ者は，
> その手のわざをながく楽しむ・・・
> 彼らの勤労はむだでなく・・・
> （イザヤ書65章21-23節，口語訳）

聖書が明言しているからには「天にも仕事がある。贖われたすべての者は，ぼんやりと夢見るような怠惰の中に生きるのではない」[44] とエレン・ホワイトは目を覚まさせる。そしてこう結論づける：

> 贖われた人々は，新しい地において，最初アダムとエバに幸福をもたらした仕事と楽しみに従事する。彼らはエデンの生活をする。それは園と畑の生活である。「彼らは家を建てて，そこに住み，ぶどう畑を作って，その実を食べる。彼らが植えるものは，ほかの人が食べない。わが民の命は，木の命のようになり，わが選んだ者は，その手のわざをながく楽しむからである」（イザヤ書65：21，22）。[45]

以上見てきたように，エレン・ホワイトは労働を，全歴史を通して，いやそれどころか未来永劫にわたって，人間にとって本質的なものと見なすのである。なにしろ天国に行っても仕事があり，働くことが大切だというのだから。

いやそもそも，確かに聖書には，神自身働く存在として示されている。イエスはこう言ったはずである:「わたしの父は今もなお働いておられる。だから，わたしも働くのだ」（ヨハネによる福音書５章17節）。その神が，「すべてのものが働くよう意図された」，とエレン・ホワイ

トは言う。「神ご自身が絶えず働いておられるのだから」[46] と。

さてそこで次に，それでは具体的にどんな意味で，どんな点で，労働は，労作教育は，重要なのか。すでにこれまでのエレン・ホワイトの文章の中でもいくつか触れられているが，それらを整理して考察することにしよう。

(2) 労作教育の重要性——具体的観点から

労作教育の「効用」はいかなるものか。エレン・ホワイトは体系的な思想家ではない。労作教育についても集大成的な著作があるわけではなく，その折り折りの必要に応じてメッセージを発している。彼女の主張をいくつかの項目のもとに整理し，代表的な文章を列挙して検討してみたい。労作教育に関する彼女の使信は多いが，内容はいずれも同工異曲。代表例を見るだけで要点は押さえることが出来る。

身体的健康

> 活動しないと組織は弱くなります。神は活動的で役立つようにと人間をお造りになりました。すべての筋肉を正しく働かせて有用な仕事をすることほど，青年たちの体力を増すものはありません。[47]
>
> 毎日一定の時間を，戸外で筋肉を使うことにあてなければ，健康を保つことはできません。定まった時間を何らかの筋肉労働，からだのあらゆる部分を動かすような仕事にあてるようにさせなさい。知力と体力を同じように働かせるようにさせなさい。そうすれば学生の精神は活気を帯びてきます。[48]

労働が身体の健康に，特に育ち盛りの子供たちの身体の発達と健康に必要なことは誰も異論がないであろう。ただエレン・ホワイトの場合，「毎日一定の時間を」とか，「知力と体力を同じように」とか，バランスのとれた表現が目立つ。もうひとつだけ見ておこう。

> 学校に閉じこもって本ばかり見ている子供たち青年たちは，健康な身体を持つことができません。適当な運動をしないで，勉強で頭ばかり使っていると，血液は脳にばかり集中して，体内の血液の循環はバランスのとれないものになってしまいます。頭脳に血液が集中しすぎ，体の末端には少なすぎるという状態になってしまうのです。勉強は一定の時間に制限し，一日の一部分は筋肉労働に費やすようにする必要があります。[49]

知力

真の知性，真の知的能力は，労働を含む健康的な生活によってのみ得られると，エレン・ホワイトは繰り返し強調する。

> 知的また霊的な力は肉体の力と活動によって大いに左右される。肉体の健康を増進するものはすべて，強い精神と均斉の取れた品性の発達を助長する。[50]
>
> 身体は活動するようにつくられている。活動的な運動によって肉体の能力を健康に保

たなければ，知的な能力をいつまでも最高度に用いることはできない。(51)

肉体労働は知性の涵養を妨げるものではありません。とんでもない間違いです。肉体労働によって得られるものは人の心身の調和をとり，精神が過労に陥るのを防いでくれます。筋肉には負担が行きますが疲れきった脳を休ませてくれるのです。(52)

若者たちが脳の力も筋肉の力も弱いのは，有益な肉体労働をしっかりやっていないからです。・・・学校と労働を結びつけることによって，多くのものが得られます。そのようにするならば，学生たちの精神は活発になり，思考は活力を帯びてきます。そして，勉強だけしている時より，もっと多くの知的な仕事を成し遂げることができます。(53)

体を十分に動かす⟶血液の循環が良くなる⟶脳も活性化⟶知的作業もはかどる，ということで，これは誰しも納得できることである。もうひとつだけ紹介しよう。

筋肉労働は青少年にとって必須のものである。・・・精神と身体の両方を正しく働かせるなら，すべての能力を伸ばして強くすることができる。精神も身体も正しく保持され，さまざまな仕事をこなすことができるようになる。・・・知力と同様，体力を正しく用いるなら，血液の循環は均等になり，人体組織のどの器官も正しく機能することができる。(54)

道徳的な力

身体的健康や知的能力のみならず，道徳的な力という面からも労働は不可欠だとエレン・ホワイトは主張する。

自分たち自身の身体的健康と道徳的利益のために，子どもたちは働くことを教えられるべきです。たとえ経済的にそうする必要がない場合でも，もし子どもたちが，清く高潔な品性を持ちたいと望むなら，すべての筋肉を十分に働かせる秩序だった労働にきちんと従事する必要があります。(55)

労働と品性はどう関係するのか。彼女の論旨は明快である。少し長いが彼女の主張の一つのポイントと考えられるので，そのまま引用する：

身体の運動不足は，知力ばかりでなく，道徳的な能力まで低下させる。身体の組織全体と連結している脳神経を仲介として天と人との交際が行われ，魂の感動が与えられるのである。神経組織の感応電流の循環が妨げられて，活力が弱くなり，知的感受性が鈍くなるときに，霊性の目覚めはいっそう困難になる。

さらにまた，過度の勉強によって，血が頭にばかり集まってしまうと，病的な興奮状態を生じて，自制力が低下し，一時的な感情や気まぐれに支配されることが非常に多くなる。こうして，不純に対してとびらが開かれる。肉体の能力を全然用いないかあるい

は誤ったことに用いることが，世界中に広がっている堕落の風潮の大きな原因である。[56]

ここには2つの論点が述べられている。一つは，多分に宗教的な響きを持つが，脳神経が人の霊あるいは宗教的感受性を司る，そして体の活力が弱まると，脳のこうした働きも低下する，というのである。そもそも「天と人との交際」という，おそらくは啓示や祈り・瞑想等をさすかと思われる表現も，客観的に検証できるものでもないし，こうした方面の科学的な裏付けは不可能であるが，ただ一般に肉体と魂を切り離しがちな中で，両者の密接なつながりを強調している点は注目に値する。[57] もう一つは，頭ばかり使っていると「病的な興奮状態」を生じ，自制力が低下して衝動的になるというのである。これはまことに良く分かる。頭にばかり血が行って，すぐにカッとなる現代人。自制心の欠如は，日本だけでなく世界的な傾向であろう。体を動かさず，目と頭ばかり使い，「病的な興奮状態」に陥っている現代社会の危険性が，ここで指摘されている。現代の状況を考えるとき，「身体活動は思考の廉潔に必要不可欠である」という彼女の主張は，[58] 無視できない重みを持つように思われるのである。

誘惑への防壁

前述の道徳的力と関連するが，エレン・ホワイトはしばしば，労働は「誘惑への防壁」[59] であり，「悪に対する最も確かな防御の一つ」[60] であると説く。ここにはいくつかの意味が込められている。

たとえば，まず，先ほども見たように労働は自制心を養う，さらに，良い習慣（勤勉や整理整頓など）を身につけさせる，責任を負うことを教える，自分に自信が持てるようになる，[61] かくて全体として，堅固にして健全な品性形成を助ける，というのである。

労働は・・・誘惑への防壁である。労働による鍛錬は放縦を防ぎ，勤勉と純潔と強固な心を助長させる。[62]

勤勉，思慮深さ，世話をすることなどの習慣を身につけるよう訓練されてきた人は，本当に少ないものです。現代の子供たちにとって，怠惰と不活動が最大のわざわいになっています。健全で有益な労働は，よい習慣と立派な品性を作ることによって，大きな祝福となります。[63]

ここで注意しておきたいことは，エレン・ホワイトは「怠惰」を大きな危険と見なしているということである。人間はヒマがあると安逸に流れ，ろくなことはしない。閑居して不善をなす。人間は弱く，愚かで，誘惑に陥りやすいという，醒めた人間観がそこにはある。「現代の私たちの世界の最大の呪いは，怠惰ということです」[64] と彼女は述べ，また「多くの場合，貧しさは恵みです。なぜならそれは子供たちを，怠惰による破滅から守ってくれるからです」[65] とさえ言い切っている。ソドムの滅亡をもたらした「高慢，飽食，そして怠惰」（エゼキエル書16章49節。KJV）は，今日も人類にとって「恐るべき敵」だと彼女は警告するのである。[66] そこで次のような勧告も納得がいく：

もし学校に筋肉労働のための施設が備えられ，学生たちが一定の時間をそれにあてることが必修とされるなら，教育機関に一般に見られる多くの悪影響に対する防壁となることがはっきり分かるでしょう。軽薄で退廃的な娯楽に代わって，男らしい有益な仕事は，はち切れんばかりの若い命に正当な活動の場を提供し，まじめで堅固な品性の形成を促します。・・・有益な労働を身につけるなら，幾千もの人々をだめにしてきた，そして今なおだめにしているあの病的な感傷主義から大いに守られます。頭脳だけでなく筋肉も使うことによって，実生活の地味な務めをこなせるようになるのです。(67)

ヒマな人間は空想にふける。「多くの小説作家たちは，安逸という宮殿の甘い夢に人々をさそっている。・・・それは，幾万の人々から人生のきびしい問題に必要な時間と精力と自己鍛錬とを奪っているのである」。(68) しかし労働は，労作教育は，白昼夢から人を救い出し，現実の生活に適した者とする。「安逸という宮殿の甘い夢（pleasant dreams in palaces of ease）」に陥らぬよう守り，正しく現実に取り組ませるのである。かくて，「働くことによって悪魔の誘惑は無力にされ，悪の潮流は押しとどめられる」(69) とエレン・ホワイトは確言する。

有用性

労働は人を実際的にし，役立つ者とする。この「人に役立つ者となる」という点を，エレン・ホワイトは労作教育の主要目的の一つとして強調する：

若い人たちが役に立つ人間になるように訓練され，人生の重荷を負うことを教えられるとき，心と品性の成長はもっとも効果的に促進される。(70)

子どもたちの人格形成に，人の役に立つという土台を据えることは，親の厳粛な責務である。(71)

秩序だった労働を身につけさせる必要があります。・・・人の役に立つということ，そして自分を抑えて他の人たちを助けるということに子どもたちが感じる満足感は，彼らが味わう最も健全な喜びとなるでしょう。(72)

労作教育には，自分の健康や知力，道徳力の発達を促すという面だけでなく，自己の有用性を増して他の人たちの役に立てるようになるという，いわば社会性の発達ともいうべき側面がある。自己中心ではない。「青少年の心の中に，体を動かして，自分たちの益となり他の人々の助けとなることをしよう，という気持ちを起こさせる必要があります」。(73) 他者を意識しての，それも，他者を助け，役に立つ者となるための労作教育という観点に，エレン・ホワイトの見解のもう一つの特色があると言えよう。子どもたちは「世の中で役に立つ者となるために，正しい教育を大いに必要としている」(74) と彼女は強調する：

いつも忙しい人たち，自分たちの日ごとの務めに快活に取り組む人たちは，社会の有

用な一員である。自分の前にあるさまざまな務めを忠実に果たすことによって，彼らは自分たちの生活を自分自身にとっても他の人にとっても祝福とするのである。(75)

ここで付け加えると，有用性と関連して実際性ということも繰り返し説かれている。役に立つ人間とは実際的な人間である。これは先ほど見た「怠惰」や「感傷主義」とも関連してくるが，実生活に適した実際的人間をと彼女は訴える：

私たちは，ほとんどすべてのものが浅薄でうわべだけの時代に生きています。堅固でしっかりした品性の持ち主は少ないものです。それは幼い頃からのしつけや教育が，うわべだけの皮相的なものだからです。・・・克己や自制が彼らの中に形造られていません。ただ可愛がられ甘やかされて，実生活には役立たない者になってしまっています。(76)

主として書籍だけから得た教育は，とかく表面的な考え方に陥りやすい。実地の働きによって，綿密な観察力と独自な考え方が養われる。実地の働きが正しくなされるとき，それはいわゆる常識という実際的な知恵の発達に役立つ。また物事を計画し実行する能力が発達し，勇気と忍耐力が増し加わる。(77)

ただの運動・体育と労作教育とのいちばん大きな違いがここにある。労作教育は，単なる身体的運動を超えて，実際的な人間となり他者に役立つ存在となるという目的を持っているというのである。労作には「満足感」が伴う。なぜならそうした有益な労働は「人の役に立っているという意識」と「義務を十分に果たしたという良心の満足」が得られるからである。(78)

救済史的意義

最後に，宗教家エレン・ホワイトの面目躍如たる部分に触れねばならない。それは，労作教育の救済史的意義である。彼女によれば，「教育」とはそもそも「知，徳，体の能力の円満な発達」を意味しており，「この世における奉仕の喜びとさらにまたきたるべき世界におけるいっそう広い奉仕の，より大いなる喜びのために，生徒を準備させること」である。(79) とすれば，全人的発達を促す労作教育，他者の役に立つという奉仕の精神を培う労作教育は，そうした「教育」の中心的役割を果たすということができる。

心身全体を健全に働かせることが，広く深い［真の意味の］教育をもたらす。どの学生も，一日の一定の時間を活発な労働にあてるべきである。そうする時に，勤勉な習慣が形成され，自立の精神が養われ，他方では，怠惰がしばしば引き起こすところの多くの悪習から守られるのである。これはまさしく，教育の第一目的にかなっている。というのは，活動，勤勉，純潔を奨励することは，創造主の御心と一致しているからである。(80)

この意味で「有用な筋肉労働は救いの計画の一部」だということになる。(81) そして，

心配や疲労や苦痛を伴ってはいるが，しかしそれでも労働は幸福と成長の源であり，誘惑への防壁である。その訓練は放縦を阻止し，勤勉と純潔と堅固を促進する。こうして労働は，われわれを堕落から回復させる神の偉大なご計画の一部となるのである。(82)

このように，これまで見てきたような，いわば人間が人間らしく生きるための労作教育という範囲を超えて，救済史的意味での「人間回復」の重要な部分を労作教育は担っているとするのが，エレン・ホワイトの信念であった。

Ⅳ．おわりに

エレン・ホワイトの労作教育観を概観し，検討してきた。

キリスト教的色彩の濃い点は別として，彼女の指摘した論点の中には，まさにわれわれの生きる現代にあてはまるものがあるのではないか。特に，ＩＴ時代が叫ばれ，教育にもＩＴが導入されつつある今，子どもたちは疑似体験ばかりが肥大化している。テレビ，ビデオ，ゲーム，そしてパソコン。目と指を使うだけで，体全部を使っての実体験が，ますます少なくなってきている。現実（リアリティ）よりも仮想現実（ヴァーチャルリアリティ）のほうが比重を増している。感受性の柔らかな子どもたちが「魔法の国」にいる。(83) これは健全とはいえないのではないか。そしてコンビニ文化。何でもいつでも手に入る便利さ。そして消費文化。「生産」はどこかに行ってしまって，「消費」が生活の中心となってしまった。こうした流れの中で，現代人はいま一度，あえて19世紀の素朴な労作教育論に立ち返ってみてもいいのではないか。

20数年前になるが，「子どもの遊びと手の労働研究会」という教師・研究者グループが『子どもの遊びと手の労働』という一書を世に問うたことがある。冒頭にはこう記されていた：

わたしたちが，遊びや労働の中で子どもに「巧みな手」を育てたいと願うのは，・・・それが，子供の全面的な発達にとってとても大事だと思われるからです。子どもたちは，遊びや労働の中で，・・・あらゆる能力を発達させるための基本である能動性や積極性を身につけていきます。(84)

落ちこぼれが増えているといわれる中で，「学ぶねうちのある教育内容をわかりやすく感動的に教える努力や，明るい未来を子どもたちに保障する努力」が不可欠なのはもちろんであるが，

しかし，そういう努力のさらに基礎のところに，子どもに自分の手やからだをぞんぶんに使って遊び，働く経験をさせ，その中で，五官をとおしてものごとを確かめ，理解し，困難をのりこえていけるような力を身につけさせるという大事な仕事があるように思います。(85)

これは「遊び」を含んだものとなっているが，「働く経験」に注目すれば，そのままわれわ

れが見てきたところと重なるものとなる。しかもエレン・ホワイトの視野はさらに広く，射程はさらに長い。こうした『子どもの遊びと手の労働』が出版されてから四半世紀が過ぎ，ＩＴ文化が急速に進行する中で，「労作教育」はますます今日的課題となってきているように思われる。(86)

知・徳・体すべての面でバランスのとれた成長・発達。からだ全体を使う筋肉労働。実生活の中での手ごたえのある実体験。そうした中でこそ思考もより活発となり深みのあるものとなる。脳の不健全な興奮を抑え，自制心を養い，自立心を育て，勤勉や責任感を身につけさせる。現実に役に立つ実際的な人間となるよう奨励し，他者を助けるという精神を培う――これらはまさに現代社会に求められている教育であり，人間像ではなかろうか。

19世紀後半のエレン・ホワイトの主張は，その根底において，21世紀の現代にこそあてはまると言えよう。当時は転換期で，教育観も揺れ動いていた。今も一大転換期で，教育も大きく揺らいでいる。その中で，現代という時代に合った新たな「労作教育」が考えられていいのではないか。エレン・ホワイトの労作教育観には，今こそ学ぶべきものが数多く含まれていると思われるのである。

註

（1） エレン・ホワイトに関しては，信頼するに足る客観的学問的伝記類は未だ刊行されていない。とりあえず拙著『終末・預言・安息日――19世紀アメリカとエレン・ホワイトの安息日論』（新教出版社，1998年)を参照されたい。

（2） 大畑末吉訳『絵のない絵本』（岩波文庫。昭和28年），41頁。なお，訳者註によれば，「ハイネの詩集『歌の本』抒情詩的間奏曲39からとった詩句」（同102頁）。

（3） R. W. Schwarz, *Light Bearers to the Remnant* (Mountain View, CA: Pacific Press, 1979), 118; George R. Knight, “Early Adventists and Education: Attitude and Context” (George R. Knight, ed., *Early Adventist Educators* [Berrien Springs, MI: Andrews University Press, 1983]), 4-5.

（4） Charles Alpheus Bennett, *History of Manual and Industrial Education Up to 1870* (Peoria,IL: Chas. A. Bennett Co., Inc., 1926), 60ff.

（5） ロック，梅崎光生訳『教育論』（『世界教育学選集』４，明治図書出版，1960年），240，241頁。

（6） Bennett, *Up to 1870*, 77ff.

（7） Ｊ．Ｊ．ルソー，永杉喜輔，宮本文好，押村襄訳『エミール』（『西洋の教育思想』4，玉川大学出版部，1982年），200，209，211頁。

（8） Bennett, *Up to 1870*, 106ff, 128ff, 166ff.; Schwarz, 118-9. なお，ペスタロッチの思想を受け継いで，特に労働の教育的意義を唱えたのがケルシェンシュタイナー（Kerschensteiner. 1854-1932）である。『労働学校論』（藤沢法暎訳。『世界教育学選集』58．明治図書出版，1971年）参照。

（9） Bennett, *Up to 1870*, 90ff.

（10） George R. Knight, “The Transformation of Education,” (Gary Land, ed., *The World of Ellen G. White* [Washington, DC: Review & Herald Publishing Association, 1987]),164. 金子忠史『変革期のアメリカ教育――大学編』（有信堂高文社，1984年），13-14頁。

（11） Bennett, *Up to 1870*, 182ff. ; Schwarz, 119. 「マニュアル・レイバー運動とその影響」（梅根悟監修・世界教育史研究会編『世界教育史大系32――技術教育史』（講談社，1978），378-382頁。

（12） Bennett, *Up to 1870*, 189ff.; Knight, “Transformation of Education,” 164.

（13） Knight, “Early Adventists and Education,” 6, “Transformation of Education,” 164-6.

（14） Knight, “Transformation of Education,” 165.

（15） Knight, “Early Adventists and Education,” 5-6.

（16） Ibid., 6-7; Knight, “Transformation of Education,” 168. なお，モリル法に関しては，大浦猛「州立大学の普及と高等職業教育の進展」（梅根悟監修『世界教育史体系17――アメリカ教育史Ｉ』［講談社，1975年］），260-270頁に詳しい。

(17) Knight, "Transformation of Education," 172; Charles Alpheus Bennett, *History of Manual and Industrial Education 1870 to 1917* (Peoria, IL: Chas. A. Bennett Co., Inc., 1937), 347ff.
(18) Knight, "Early Adventists and Education," 7, "Transformation of Education," 169-70.
(19) 金子，19-20頁参照。
(20) 拙著16-41頁参照。
(21) 同書37頁；Schwarz, 120; Knight, "Early Adventists and Education," 2.
(22) Schwarz, 120.
(23) Knight, "Early Adventists and Education," 2.
(24) Ibid., 2-3.
(25) George R. Knight, *Myths in Adventism* (Washington, DC: Review and Herald Publishing Association, 1985), 235-50. 特に235-236頁を参照されたい。
(26) Knight, "Early Adventists and Education," 6.
(27) George R. Knight, "Oberlin College and Adventist Educational Reforms," *Adventist Heritage* 8: 2 (Spring 1983): 3-9.
(28) エレン・ホワイトの健康改革メッセージや安息日メッセージについても同じことが言える。以下のものを参照されたい。 Ronald Numbers, *Prophetess of Health: Ellen G, White and the Origins of Seventh-day Adventist Health Reform* (Revised & Enlarged Edition. Knoxville, TN: University of Tennessee Press, 1992); Yoshio Murakami, "Ellen G. Whites Views of the Sabbath in the Historical, Religious, and Social Context of Nineteenth-Century America," (Ph. D. dissertation, Drew University, 1994).
(29) "Department of Education." http://education.gc.adventist.org/ January 24, 2005.
(30) Ellen G. White, *Education* (Mountain View, CA: Pacific Press Publishing Association, 1903), 214-22,［邦訳，左近允公訳『教育』（福音社，1973年［改訂版］），254, 255, 258, 259-60, 261頁］。
(31) Ellen G. White, "Proper Education," *Testimonies for the Church*, vol. 3 (Mountain View, CA: Pacific Press Publishing Association, 1948), 131-60. 特に148-59.なお，George R. Knight, "Ellen G. White: Prophet," (George R. Knight, ed., *Early Adventist Educators*, 26-49), 27参照。
(32) Ellen G. White, *Child Guidance* (Nashville, TN: Southern Publishing Association, 1954), 127［邦訳，広田実・村上良夫訳『家庭の教育』（福音社，1979年），121頁］。
(33) Ellen G. White, *Patriarchs and Prophets* (Mountain View, CA: Pacific Press Publishing Association, 1890), 50［邦訳，清野喜夫訳『人類のあけぼの（上巻）』（福音社，1971），25頁］。Ellen G. White, *Fundamentals of Christian Education* (Nashville, TN: Southern Publishing Association, 1923), 314等も参照。
(34) Ellen G. White, *Testimonies for the Church*, 3: 153.
(35) Ellen G. White, *Patriarchs and Prophets*, 50［邦訳，上巻56頁］。
(36) Ellen G. White, *Fundamentals of Christian Education*, 419.
(37) Ellen G. White, *Patriarchs and Prophets*, 593［邦訳，下巻255頁］.
(38) Ibid.［邦訳，下巻256頁］.
(39) Ibid., 601［邦訳，下巻262-3頁］.
(40) Ellen G. White, *The Desire of Ages* (Mountain View, CA: Pacific Press Publishing Association, 1898, 1940), 72［邦訳，左近允公訳『各時代の希望』上巻（福音社，1963年），65頁］.
(41) Ellen G. White, *Child Guidance*, 346［邦訳，369頁］.
(42) Ellen G. White, *Desire of Ages*, 72［邦訳，上巻65-6頁］.
(43) Ellen G. White, *The Acts of the Apostles* (Mountain View, CA: Pacific Press Publishing Association, 1911), 353［邦訳，清野喜夫・安藤千代子訳『患難から栄光へ』下巻（福音社，1978年），34頁］.
(44) Ellen G. White, *My Life Today* (Washington, DC: Review and Herald Publishing Association, 1952), 358.
(45) Ellen G. White, *The Story of Prophets and Kings* (Mountain View, CA: Pacific Press Publishing Association, 1917), 730-1［邦訳，清野喜夫訳『国と指導者』下巻（福音社，1977），333頁］.
(46) Ellen G. White, *Counsels to Parents, Teachers, and Students regarding Christian Education* (Mountain View, CA: Pacific Press Publishing Association, 1913), 280.
(47) Ellen G. White, *Child Guidance*, 340［邦訳，362頁］.
(48) Ibid., 342-3［邦訳，365頁］.
(49) Ibid., 340［邦訳，362頁］.
(50) Ellen G. white, *Education*, 195［邦訳，232頁］.
(51) Ibid., 207［邦訳，246頁］.
(52) Ellen G. White, *Testimonies*, 3:152.
(53) Ibid., 3:159.

(54) Ellen G. White, *Fundamentals of Christian Education*, 321.
(55) Ellen G. White, *Testimonies*, 3:151.
(56) Ellen G. White, *Education*, 209［邦訳，248頁］.
(57) エレン・ホワイトはこの点を繰り返し強調している：「肉体は精神と魂が品性の向上へと発達する上での唯一の媒体［medium］である。だから魂の敵は肉体の能力を弱らせ堕落させる方向へと誘惑の手を伸ばすのである」(Ellen G. White, *Ministry of Healing* [Mountain View, CA: Pacific Press Publishing Association, 1905, 1909], 130)。
(58) Ellen G. White, *Education*, 209.
(59) Ibid., 214［邦訳，254頁］.
(60) Ellen G. White, *Counsels to Parents*, 275.
(61) Ellen G. White, *Patriarchs and Prophets*, 601［邦訳，下巻263頁］.
(62) Ellen G. White, *Education*, 214［邦訳，254頁］.
(63) Ellen G. White, *Child Guidance*, 342［邦訳，364-5頁］.
(64) Ellen G. White, *Sermons and Talks*, vol. 1 (Silver Spring, MD: E. G. White Estate, 1990), 280.
(65) Ellen G. White, *Child Guidance*, 342［邦訳，364-5頁］.
(66) Ellen G. White, *Education*, 209.
(67) Ellen G. White, *Testimonies*, 5:90.
(68) Ellen G. White, *Education*, 227［邦訳，268頁］.
(69) Ellen G. White, *Counsels to Parents*, 274.
(70) Ellen G. White, *Education*, 215［邦訳，254頁］.
(71) Ellen G. White, *Counsels to Parents*, 122.
(72) Ellen G. White, *Testimonies*, 3:151.
(73) Ellen G. White, *Child Guidance*, 346-7［邦訳，370頁］.
(74) Ellen G. White, *Testimonies*, 3:142.
(75) Ellen G. White, *Counsels to Parents*, 275.
(76) Ellen G. White, *Testimonies*, 3:143.
(77) Ellen G. White, *Education*, 220［邦訳，261頁］.
(78) Ellen G. White, *Counsels to Parents*, 308.
(79) Ellen G. White, *Education*, 13［邦訳， 2 頁］.
(80) Ellen G. White, *Counsels to Parents*, 308.
(81) Ellen G. White, Ibid., 307.
(82) Ellen G. White, Ibid., 274.
(83) "I saw that God's people are on the enchanted ground, and that some have lost nearly all sense of the shortness of time and the worth of the soul." (Ellen G. White, *Early Writings* [Washington, DC: Review and Herald Publishing Association, 1882, 1945], 120); 村上良夫「魔法の国の子どもたち」(『週刊教育資料』No. 589［1998 August］，50頁)，参照。
(84) 子どもの遊びと手の労働研究会『子どもの遊びと手の労働』(あすなろ書房，1977年)，「はじめに」より。
(85) 同上。
(86) 小学５，６年生240人を対象とする徳島大学の最近の調査（2001年）によれば，よく遊び，手伝いもよくしている子はストレスが少なく，攻撃性も低かったという。「家庭の中で役割のある人格を持った人間として位置付けられることが，心の安定につながるのでは」(徳島大・佐野勝徳教授)［朝日新聞　2004年12月27日付，コラム「なるほど情報」参照］。

■ 戻る ■